

「恵みの下もとにある」

(ローマ6・15-14)

一、恵みに生かされるとは

6章は、屁理屈屋が次のように言うであろうと想定したことばから始まっています。1節です。〈それでは、どのように言つべきでしょうか。恵みが増し加わるために、私たちは罪にとどまるべきでしょうか。〉と。人が屁理屈を言いますと、それを聞いた人たちは、「変だな、屁理屈だなあ」と感じるものです。と言つことは、屁理屈は「罪」から来ています。すなわち、神が創造された本来のかたちではないのです。パウロは続けて語ります。2節です。〈決してそんなことはありません。罪に対して死んだ私たちが、どうしてなおも罪のうちに生きていられるでしょうか。〉と。屁理屈は「罪」から出ています。なぜなら屁理屈は、キリストを信じて救われ、罪に対して死んだ私たちから出て来ないからです。

二、キリスト・イエスにつくバプテスマ

私共主イエス・キリストを信じ、教会につながつている者は、どうやって救われている事実を知るのででしょうか。それは、3節からです。〈それとも、あなたがたは知らないのですか。キリス

ト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたではありませんか。〉とパウロは語りました。ここに、〈につく〉とありますが、元のことばは「の中に」です。と言つことは、パウロが語りんとしていることは、「キリスト・イエスの中にバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたではありませんか」となりま

す。主イエス・キリストを、神が遣わされた唯一の救い主であり、また神御自身であると信じて、水のバプテスマ(洗礼)を受ける人は、主イエス・キリストの中にバプテスマを受けるのです。すなわち、キリストと一つになるのです。だから、3節後半で語られています。

〈その死にあずかるバプテスマを受けただけではありませんか。〉と。そういう思いを持って4節以降を見て行きますと、意味が良く分かります。4節です。〈6・4〉とあります。読んだだけでパウロ先生が語ったことばを理解できます。主イエス・キリストは、十字架で私共罪人が受けなければならぬ聖なる神からの罰を、身代わりに受けてくださり、死なれました。しかし神は、主イエスを死者の中からよみがえらされました。と言つことは、私共がキリストの死と一つになっているのであるなら、キリストの復活とも同じようになります。そのことが、5節で語られています。〈6・

5〉と。この、主イエス・キリストと一つになる儀式が、水のバプテスマ(洗礼)です。6節をご覧ください。〈6・6〉とあります。主イエス・キリストを信じる前の自分のことが「古い人」と語られています。「古い人」とは、「生まれながらの人」です。ですが、主イエス・キリストを信じるなら「生まれながらの人」が持つ不思議な状態、すなわち、善き創造者が造られた人間に宿っている不思議な傾向から解放されます。なぜ解放されるのでしょうか。神のわざだからです。私共主イエス・キリストを信じる者は、バプテスマによってキリストと一つになりましたから、今や罪から来る死——神の前に死んでいる状態——は、私たちを支配しないのです。

三、私共は恵みの下もとにある

主イエス・キリストを信じる者は、罪から解放されています。すなわち、神のかたちに似せて創造された「人(アダム)」本来のかたちに戻りセットされました。しかしアダムよりも有利です。アダムは一度選んだ、自分の判断で生きて行く道、すなわち罪の道が、その後の人生において、否、人類全般に逃れられない罪をもたらししました。ですが、キリストを信じる者の場合は、そうではありません。キリストを信じて、私共は多くの失敗をします。その場合の失敗とは、主のみこころを損ねてしまうよう

な失敗です。ですが、そうならないように主は、御自身の分身のような聖霊を遣わしてくださいました。聖霊はキリストを信じる者の人格の中に住まわされます。この御方が、私共主イエス・キリストを信じる者が罪を犯さないように守ってくださいます。だから、最初の人アダムよりも圧倒的に有利な状況に置かれています。

そういうわけで、私共主イエス・キリストを信じる者がなすべきことは、12節、13節です。〈6・12-13〉です。罪が私共を支配することはないのに、どうして〈からだの欲望に従ってはいけません〉と語られているのでしょうか。それは最初のアダムの時がそうであったように、神は私たちの意思を塗りつぶすようなことは、なさらないからです。救いをいただいた私たちでも、罪を犯すことはできます。いつときに、神のみことばに背を向けることはできませんが、「これくらいはかまわないではないか」という、本来のあるべき状態を取り崩すような思いがやって来て、それを続けていると、やがて大きな罪を犯すようになります。

皆さま。信仰生活は「これをやったら罪になる」とか、あまり小さな事にこだわって、ちまちまと生きるのではなく、主にあつておおらかに生きてください。罪が私たちを支配することはありません。私共は、恵みの下もとにありますから。